

みなさん、サソリやクモを見て「おいしそう」と思いませんか。気持ちが悪いですか？日本人は、あまり虫を食べ慣れていないので、このような虫を見ると、気持ちが悪いと思う人が多いです。でも、世代や地域によっては、イナゴや蜂の子を食べていましたから平気だという人もいます。先ほどのサソリやクモも中国の人達にとっては高価な体に良いおいしい食べ物です。私たちは、生活する周囲の状況によって考え方や捉え方が変わってきます。人に対しても同じです。相手がどう出てくるかによってその人に対する考え方が変わってきます。だから、私たち人間ひとりひとりの主観はまちまちです。いつまでも変わらない、何があっても変わらない聖書の本質によって物事を判断していかなければならぬのです。そして、人の主観による考えが万延している世の中で、クリスチャンがどう生きるかが大事なのです。神さまは絶えず個人が変わることを願っておられます。そうすると結果、世界が変わるのです。ですから、私たちが気をつけなければならないのは、いつもこの「個」に目を向けていることです。その「個」に目を向けているために、いつも「神の時」を見ていなければなりません。伝道者の書3：1～14にはいろいろな時が出てきますが、締めくくりが「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」なのです。なぜ神さまは時を美しいと言われたのでしょうか。それを考え、また、美しいと感じて生きたいですね。

■ 愛と気使い、気遣いは違う

マリアとマルタの話(ルカ 10:38～42)があります。イエスさまが自分たちの家に来たくださったということで、マルタはもてなすことに一生懸命でした。一方のマリアはイエスさまのそばに座って動きませんでした。それでマルタは、マリアにはではなくイエスさまに「主よ。妹が私にだけおもてなしをさせているのを、なんともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください」と怒ったのです。マルタは本当にイエス様が来てくださったことを喜んでいたり、おもてなしをしたかったからやっていたのです。本当は、怒るところではないのに腹がたってきたのです。なぜでしょう。こんなマルタにイエスさまは「あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。」と言われました。「愛」と「気使い・気遣い」は違うのです。マルタが心からの愛でおもてなしを行っていたのであれば「私がやりたいとやっているのだから誰がどんなことをしようが問題ない」という思いで腹が立つことはありません。しかし、気遣いで行っていたのなら「お前も気を遣えよ!」となるのです。私たちの間では、この気遣いが発生します。この気遣いは、相手のことを思っているもので無駄になるものではありませんが、本質ではありません。現実です。お互いが生きていくための手段です。最近はこの気遣いすらしないで自己流で成功するなどというドラマがありましたが、自分の主観にのみ生きて気すら遣わなかったらどうなると思いますか。秩序なんてなくなります。現代はこの両極端になりつつあります。そしてこの両極端には解決が見いだせません。しかし、聖書は愛という解決を与えてくれています。私たちクリスチャンは気遣いではなく愛で行動するのです。みなさん、盲導犬を知っていますよね。盲導犬は、パートナーに対する愛のみに生きています。自分の身を犠牲にしてパートナーを導き、守ります。たとえ自分が刺されても倒れることなく血を流しながら家まで送り届けるのです。これは気遣いでしょうか。違います!愛であり、イエスさまの姿です

■ 主観から神の価値観へ

この気遣いによって、神の美しさや感動が取り去られるのですが、この気遣いが何から発生するかという、自己の主観です。ぜひ聖書を読んで自己の主観から神の価値観へ戻りましょう。聖書の学びも大切ですが、まず、聖書を読んで、この箇所では神さまはどんなことを伝えたかったのか、なぜこうされたのか、イエスさまが誰かを癒す時、なぜこう言われたのか…。マルタにイエスさまがどうして「あなたは気を使っている」と言ったのかを感じて欲しいのです。これは学びでは理解できません。聖書を読んで祈って神さまに聞かなければ分かりません。神さまの愛に生きる一番の方法は神さまを感じるということです。人の目で見ると不

幸に見えることでも神の目から見れば素晴らしいことがあります。神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠を与えられた。しかし人は、神が行われるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。(3:11)」と書かれている通りです。神さまの永遠の計画は一時の目の前の苦しみに終わることはないのです!私たちの主観で判断できるようなものではありません。ですから今日から、人と接する時に主観で判断しないように気をつけましょう。「自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい(マタイ 7:12)」とあるからと言って多くの経験を踏まえた自分の考え・自分の主観で判断して行うのではなく、神様の価値観で行っていきましょう。

■ シンプルな目線。エッセンスは単純

聖書の言っていることは常にシンプルです。それなのに私たちは、わざわざ複雑にして難しい教えにしたいのです。とくに現代人は、多少難しくないと「こんなに簡単なことで…信じられるか!」とナアマン将軍のように怒るのです(II列王記5章)。ナアマン将軍はツァラトが癒される方法を預言者から聞いたのですがそれが「ヨルダン川に行って7回体を洗いなさい」だったので。自分の主観によった考えと違ってシンプルだったので怒ったのです。聖書の教えは常にシンプルです。だから私たちの目線もシンプルにしなければなりません。この本質の原語がエッセンスの元になったエッセンティア(essentia)です。物事の本質は単純でシンプルで分かりやすいということです。しかし、現実に行っていることは複雑な現状が混じり合っているのです。そんな中で聖書は、どうしてそのような現状が起こったのか、それは愛に基づいていたのかいらないのか…実にシンプルに解決を与えてくれます。いろいろ考えないで、聖書に基づいて愛をもって関われば複雑なことにはならないのです。本質・エッセンスを入れるということはそういうことなのです。聖書は始めから終わりまで絶えず「愛に基づかなければならない」と言っています。「私は知った。人は生きていく間に喜び楽しむほか何も良いことがないのを。また、人がみな、食べたり飲んだりし、すべての労苦の中にしあわせを見いだすこともまた神の賜物であることを。(3:12・13)」単純なことなので複雑に思われることがあるかもしれませんが、それは神の愛から遠ざけ、解決させないようにされているのかもしれない。単純に神さまの愛に目を向けていきましょう。

■ 神を恐れる = 驚嘆・びっくり・感動

神を恐れることは、驚嘆・びっくり・感動です。聖書のできごとは常にびっくりすることです。だから日々、驚嘆・びっくり・感動して欲しいです。「あの時、あの人が言ったことは私に○○を知らせてくれるためのものだったんだ!」「わあ!よかった!!」と。盲導犬を通してイエスさまの姿を見ることだってあります。多くのことを通して感動して、そこから得られることが必ずあるのです。私たちが、自分の主観を通して見たり聞いて感じていることは、本当のことではないことが多いです。当たり前と思っていることがそうではないのです。だから、神さまの与えられた出来事に感動してないと自分の常識でしか物事が考えられなくなって、そのようにしか見えなくなってしまうのです。聖歌「輝く日を仰ぐ時」の歌詞に「輝く日を仰ぐ時、月星ながむる時、いかずち鳴り渡る時、真の御神を思う。我が魂、いざ讃えよ、大いなる御神を×2」とあります。日々、いろいろなことで神さまを感じて美しさに感動していきましょう。私たちクリスチャンはこの世の人たちと同じ目線にならないで、その人たちが正しい判断をすることができるように、正しい本質を得ることが出来るように祈りましょう。そうすると、私たちを通して聖霊さまが働いて、みなさんが神さまに導かれて、世界が変わります!